

小田義久責任編集『大谷文書集成 参』

(龍谷大学佛教文化研究所編、龍谷大学善本叢書 23、法蔵館、2003年3月、序言2頁
+図版63頁+釈文248頁、38,000円)

丸橋 充拓

大谷探検隊を率いて中央アジアを踏査した大谷光瑞氏の遺品から、前世紀の半ばに発見されたいわゆる「大谷文書」。以来半世紀にわたって進められた研究の成果は、『大谷文書集成』の名を冠した一連のシリーズにおいて随時公にされてきた。そしてこのほど、その第三冊目が上梓された。

周知のとおり、大谷文書には次のような内訳で1001号から8147号までの整理番号が付されている。

1001-5840 漢字・ウイグル字資料

(うち1097-1198、1313-1375、1414-1415、1539-1544がウイグル字文書)

6001-6070 チベット文字筆写断片

6101-6434 西域古語断片 (大部分はウイグル字)

7001-7550 胡漢両語文献 (記載面により文字を異にするもの)、

8001-8147 『西域考古図譜』⁽¹⁾所収文書

『大谷文書集成』シリーズでは、これらのうち漢文資料が取り上げられ、主要文書の図版および一点ごとの録文が公表されてきた。すなわち、まず『大谷文書集成・壹』⁽²⁾ (以下『壹』と略称) では1001-3000号が、ついで『大谷文書集成・貳』⁽³⁾ (以下『貳』と略称) では3001-4500号が取り上げられてきたわけであるが、今次の『参』はこれを引き継ぎ、4501-5840号、および8001-8147号文書 (既発表分は省略) が紹介されることとなったのである。

では本書の構成を、目次にしたがって概観しておこう。

序言 (小田義久氏による)

図版目次

図版

- I 高昌国時代諸文書
- II 西州時代諸文書
- III 唐代諸文書
- IV 漢籍

V 仏教関係文書

VI 道教関係文書

附 李柏文書

釈文

刊行の辞（武内紹晃氏による）

「図版」部分のうち、「II 西州時代諸文書」は籍帳・官庁文書・土地制度関係文書・契券類・経済関係文書・周氏一族納税文書・葉方書断片・占書関係・文学関係に、「V 仏教関係文書」は仏典・写経関係・入蔵経目録に分類されている。

「釈文」部分は、各文書まず先頭行に文書番号・標題・サイズが示され、ついで各種の註記が付されたのち、録文が掲げられる。註記は、裏打の有無・記載面表示・他文書との綴合関係等の外形に関わるもの、および文書発見時に付されていた原註記載（発掘地等）・仏典など典籍類の典拠・参考文献等の内容に関わるものなど多岐にわたっている。池田温氏の『中国古代籍帳研究』^④をはじめ、これまでの主要成果の参照箇所が適宜記され検索の便宜も図られるなど、『壹』『貳』の形式を踏襲して、配慮の行き届いた釈文となっている。

大谷文書の公表は、本書をもって末尾の 8147 号にまで及んだ。これにより、大谷文書漢文資料の整理・紹介は一段落がついたことになる。1948 年、大谷光瑞氏逝去の後、遺品の文書が西本願寺内事部倉庫内の木箱より発見され、翌年龍谷大学大宮図書館に一括移管されて以来、半世紀にわたって続けられたこの事業は、本書「序言」を執筆した責任編集・小田義久氏の述懐によれば、氏自身にとっても院生時代からの取り組みであったという。

当初その推進役となったのは 1953 年に仏教・歴史・胡語・美術の四部門をもって発足した龍谷大学西域文化研究会であり、その成果は『西域文化研究』^⑤全六巻として結実した。その後も、『大谷文書集成』シリーズをはじめ、目録・釈文索引類など、本書に至るまでに数多くの成果が公にされてきたことは^⑥、本シリーズ各巻の冒頭で小田氏が詳述されている通りである。

一連の研究が龍谷大学を中心に進められた時期は、大陸における吐魯番発掘プロジェクトの展開（1959～1975 年）とほぼ符合する。そもそも、今日伝わる大谷文書には、大谷光瑞氏生前の整理過程で付されたと思しい包装紙・裏打紙上の註記等によって出土地の判明するものを除けば、発見状況の詳らかでないものが多かった。ところが折しも中国新疆博物館文物考古隊が中心となって吐魯番の調査が本格化した結果、双方の文書

に綴合可能なものも多く見出され、来源確定に大きな展望が開かれた。

そして中国側の成果がまとめられ、録文版の『吐魯番出土文書』⁽⁹⁾として世に出始めたのが1981年。これはおおよそ『大谷文書集成』シリーズの発刊と重なり合っており、日中双方の整理事業が時を同じくして形になり、順次公にされていったことになる。『壹』『貳』の巻頭言には、前者刊行の時点で『吐魯番出土文書』第3冊までが、後者の段階では第8冊までが刊行されていることが、その都度報告されており、日中の学术交流が再開されはじめたまさにこの時期、新出資料の相互照合作業が文字通り進行形で展開していた様子がうかがわれる。そして本書（『参』）が刊行された現在、これに先んじて出揃った『吐魯番出土文書』録文版全10冊、図録版全4冊⁽¹⁰⁾とともに、吐魯番出土漢文資料の多くをいながらにして通観できる環境が整えられたことになる。

以上のような経緯から、『大谷文書集成』シリーズ各巻は、刊行期における調査・研究状況がそれぞれ反映されてきた。たとえば『壹』では、均田制における還受の存在を確証したいいわゆる「退田文書」「給田文書」「欠田文書」の図版が掲出された。また『貳』においては、池田温氏が西域における物価の動態を知る手がかりとした⁽¹¹⁾「物価文書」の図版や、大津透・榎本淳一両氏が大谷文書と吐魯番文書双方のアンペラ文書群を綴合し、唐代前期の財政・軍事研究に新たな知見を開いた「唐儀鳳三年度支奏抄、同四年金部旨符」⁽¹²⁾の写真等が載録された。

本書（『参』）においても、既往の研究との関係において重要なものが数多く盛り込まれている。たとえば、完存する所謂A・B文書とともに、日付が特定できる最古の現存紙「李柏文書」を構成する断片39点（8001-8039号）が、本書では附録として掲げられている。これらは『西域考古図譜』において図版のみ示されていたものだが、本書ではそのすべてに録文が付されたことになる。

また、大谷探検隊が実際に発掘をした古墓を特定できる文書として『壹』の「総論」で紹介された11点のうち、「高昌延寿九年（六三二）閏八月吳君範随葬衣物疏」（4884号文書）、「高昌重光三年（六二二）随葬衣物疏」（4917号文書）の図版が本書では収録されている（図版一）。

近年の研究に関わるものとしては、廃紙を張り合わせて青龍等の四神をつくり壁画の代用品として墓内に納める、という文書の二次的利用法が大津透氏等によって解明されたが⁽¹³⁾、本書「図版一七」には、三本爪を持つ青龍後足の形にはっきり裁断された文書「唐（開元年代）休如辞為未蒙給地事（高昌県給田関係牒）」（4880号文書）が見える。他にも多く存在する同種文書の情報は、本書所収分については該当文書「釈文」部分の註記において、『壹』『貳』で収録済み分については「序言」において適宜示されている。テキスト読解に留まらない文書研究のアプローチとして、今後の展開が期待される。

このほか、「図版三〇」から「図版四〇」まで大きな紙幅を割いて紹介されるのは、里正より生産者に交付される文書として關尾史郎氏が取り上げ、地方末端における文書行政システムの分析に用いた「周氏一族納税文書」である⁽¹²⁾。また陳国燦氏によってアスターナ 230 号墓出土「武周天授二年（公元六九一）郭文智殘辯辭」（72TAM230:68）⁽¹³⁾と綴合することが解明された「周天授二年（六九一）一月西州郭文智辨」（4937・4940号文書）は⁽¹⁴⁾、「図版七」に掲げられている。

以上に列挙したのは、『大谷文書』シリーズ各巻の冒頭で何らかの解説が付された文書のうち、本書収録分に関連するものの一部に過ぎない。むしろ本書にはこれ以外にも重要な文書が多数含まれているわけであるが、それらを個別に取り上げ、その意義を論じていくことは、西域文書研究に不案内な私の力量を超えた作業に属する。したがって論及不十分の部分については、本書を活用して今後発表されるであろう専家の各論考に委ねたいと思う⁽¹⁵⁾。

大谷文書の研究史を振り返って改めて気づかされるのは、小田氏をはじめ西域文書に携わってきた方々が、その研究体系をまるごと最初から築いてこられたことである。出土文物の整理・分析から資料集成の刊行まで、内容・形式双方のあり方を模索し、方法論を一から確立する過程を経て、はじめて今日の研究がある。私のような後学はこれらを既存の成果としてつい当たり前のように享受しがちであるが、そこに至るまでの仕事には、諸先達の多大かつ細心のエネルギーが傾注されてきたことを、ゆめ忘れてはならないだろう。

本書刊行の前年、2002年は「大谷探検隊百周年」に当たり、折しも龍谷大学で行われた各種記念行事⁽¹⁶⁾と前後して、大谷文書をめぐる環境整備はいっそうの進展を見せている。とりわけデジタル技術によるデータベースの充実ぶりは目覚ましく、同大デジタルアーカイブ研究センターのウェブサイト上では文書をカラー写真で検索・閲覧するシステムが、順次拡張されつつある⁽¹⁷⁾。

西域文書類は、流出文化財という初発の特性から、文化遺産の帰属というデリケートな問題を宿命的に抱えている。ただこうした技術的進歩は、学問的素材＝資料としての文化遺産を「国境」から解き放つ役割を担いうる。デジタルアーカイブ利用のルールづくりにはなお不確定な要素も多く、半世紀前とは次元の異なる方法論が要請される所以であるが、そうした諸問題にも徐々に折り合いがつけられ、文書研究に新たな可能性が開拓されることを祈念して、はなはだ粗雑ではあるが本書の紹介を結びたい。

注

- (1) 大谷光瑞編『西域考古図譜』上下 (国華社、1915)
- (2) 法蔵館、1984
- (3) 法蔵館、1990
- (4) 東京大学出版会、1979
- (5) 法蔵館、1958・1963
- (6) 西域文化研究会『大谷探検隊将来西域出土古文書目録・社会経済関係其一』『同・其二』(1956)、龍谷大学仏教文化研究所『大谷文書目録』(1001-3000号は1986、3001-4500号は1999)、中田篤郎『大谷文書集成・壹・釈文索引』(龍谷大学仏教文化研究所、1985)、『同・貳・釈文索引』(龍谷大学大谷文書の整理と研究会、1991)など。
- (7) 国家文物局古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系編『吐魯番出土文書』1~10 (文物出版社、1981~1991)
- (8) 中国文物研究所・新疆維吾爾自治区博物館・武漢大学歴史系編『吐魯番出土文書』壹~肆 (文物出版社、1992~1997)
- (9) 池田温「中国古代物価の一考察」(史学雑誌 1977-1・2)
- (10) 大津透・榎本淳一「大谷探検隊吐魯番将来アンペラ文書群の復原—唐儀鳳三年度支奏抄、同四年金部旨符—」(東洋史苑 28、1987)、大津透「唐律令国家の予算について—唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符試釈—」(史学雑誌 1995-12)、同「唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考—唐朝の軍事と財政—」(東洋史研究 49-2、1990)。なお本文書群の写真は、図版としてではなく「概観」10頁に掲載されている。
- (11) 大津透・野尻忠・稲田奈津子「大谷文書唐代田制関係文書群の復原研究」(東洋史苑 60・61、2003)、野尻忠・稲田奈津子「大谷文書唐代田制関係文書群の復原研究—釈文編」(東京大学日本史学研究室紀要 7、2003)。また小田義久「大谷文書研究の意義—文書から物(形)へ—」(後注(16)『仏の来た道』所収)も参照。
- (12) 關尾史郎『西域文書からみた中国史』(山川出版社、1998)
- (13) 前注(8)『吐魯番出土文書』肆、74頁
- (14) 陳国燦「対唐西州都督府勘検天山県主簿高元禎職田案卷的考察」(『敦煌吐魯番文書初探』、1983)
- (15) 『大谷文書 参』所収の仏教関連資料に検討を加えた論文としては、小田義久「西域出土の写経断片について—『大谷文書集成・参』を中心に—」(龍谷大学仏教文化研究所紀要 41、2002)、張娜麗「西域発見の文字資料〔四〕—『大谷文書集成』参 読後劄記」(学苑 764、2004)がある。なお後者はその他に文学作品、経書、道教関連資料にも目配りしている。
- (16) 大谷探検隊一〇〇周年記念事業委員会企画、杉村棟・徐光輝編『仏の来た道—シルクロードの文物—』(東方出版、2005)を参照。
- (17) 龍谷大学古典籍デジタルアーカイブセンター・ウェブサイト
(<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/RDAC/>)